百官要史

五

内閣文庫
和書
類 二八〇九〇
號
五 冊
一四 架
一〇 函
(五冊)

内閣文庫
番號 和 28090
冊數 5 (5)
函號 201 395

国立公文書館
National Archives of Japan

七月清涼殿に
近衛長宣
二年八月崩
御 後宮法隆
と語り奉る

宗德院　御諱顕仁　鳥羽院第一ノ皇子　御母ハ待賢門院

ゆきゝ
御ゆきはやゝ出るよさの海に　沖川乃はまてもまくのかをんとそおもふ

頼記集巻上影しゝ　此歌数人百首の外なのやこと出るよさの海に岩川のゆきゝ
海に岩川のゆきゝまくのかをんとそおもふ
思けるいと悲しき形る岩川のこゝろくらの外なのやめるらさはらを
乃宮殿のことりてやくこと海とゝまるのまこのまこ流まとく又一川
の流あやうのなるをいまてまくもの序のおもしろきをもへ
思御製共とりやはくむを限りとそあまを絶りの八世の外ゆくく
をあとそはやすと思ひるまちとを立へこゝまとくこゝろいつる八やち
く今ゆくりてゆくりてとのつるまくく今いとをまあやとくおも

くらも見ぬ言の葉へ其勢ひある詞を千とせの後まで方より倍に是
非ともやまと哥ハ世の人の心にあるままに哥になし筆意ハ今も昔
てもかくても更にあはれなりといひてける心を述べし古歌にいづれとも
柿本のこころのそこをあはれにありてこそ出るこゝろの人ハ心思ひ
いそ月の下より出づれバさも人のまへに其障りハ主
る言をあまた鶯の下までも羽うち桜花みどりの月も共のはまで人
を思ふにも後よりハ見れども人の気しきのなかにハ同じ言
のいと理きこえて一むかしの言葉を見るまでくへ人を知りこそ
こゝとひ吾見んかくへしと云し世の詞花集にも今のごとく花の
しをかくらるハあやまちをおこせのたとへにも行なハ後代

やみと見て歎くとも見るのひとつにせめ侍らしふたゝびかくも侍
き流をはやうといひ流行あらんにハ世のそれぞれに辞と何
とも強きこそ後のちの秋にハ花もとの趣の流のはやさにせら
流くとらふかあわれなりけるやもまでの勢のよりときこゆ
故にせまきわざらまへくやうくまでまであるかなくてしこそ何まで流
川なりとんのはわれをあへん落合て流をれんまで絶へきがい
あらす又四句を今のごとくわれをにもまでに取へのあらんまで
朝なる歌わまくまでにも母文字にもある句ハ今年までに
しきハ所との思ひそよりすゞにて其事出くといふことにいふ
ゆきハこまでもとこのまへとかるしき歌をかまひとこそ上句の

法よりくなるもしるを信ひらくなるかさまにあるまたことわり
なきなりいらひそもそもく拝者顕晴卿乃三つのれ御影をこ
るふ自我紀氏の肌骨あるもく父歌雲卿自清晴卿なと
の及ハもく所なりあるいらるもく乾坤を一時出蓋乃するを
と称をしハ博識のよるもその過琴なるへしそはこのもの乃
歌仙のく用ニなきひらまの乃伝ハ実ニよ所乃多撃な
くらあるんハ歌くいしあるそハのこのをいらふまいハめく
見海とさ事也次やこるを賢達乃部ニあきくをやこれを
古禅を濯ふ人ハ言ふうくのたのれハこるるよ所ことれとあるとあ
文をハ偽ふ所あるを法まるとうんやこれ拝者乃思ふ所を伺ひ

奉りて院をそまるの法ニ入を思へる形うんよハ家ニ亜の祈ら
すとも〻すくいたまとたとひのもよりを家亜ニ出こもとを
ふらるる陽ハ其ニ中たくまつるこまを也ちくはこと
ら乃出る所を考るよもとのおのもきハ由所頼政の思へて
出るよわの海くに山水を又ほとを形くを歌のらとよまきこ
るも同ニ大海三ハ(タカヤマニイテクルミツ)のそれ二つよわるまりきをるを
て乃言ふのかくのるを拝者ハ萬葉巻十一ニ自高山出来水
(ハニフソウレテソオモフーモニアハヌヨハ)石鏡彼妻会始不相者なるの歌ひよるまを解る事ニ思
ひらるれよるを仏なのやも岩門ニてハ歌ひくれたすとそ
其歌をたやくく世門ニなるを也そハ法華の命とする

まつのあらんかぎりとうたへるこのひゆくをたまつるハ角をなをさんと
とて牛を殺すの作なりかくハ又世集ハ天養元年のなまれる
ものなれ共ハ安の百首乃法歌ハ〻ろ事いとのくとして
よ俗世の世間乃百首とそれ奥書をつくまハ世百首の事法に
ハ作乃下まるハ廣法の作りて一統保進ものに法歌ろ久安元
年也ときハ世よ久安百首とはそなるものこの法歌ろ
ハとく御覧出有へき事也新古へ〻
○改観云ふるくわまてをりなくとつふんと繁きこの法
ハ世集集歌下藤原永實ことの作のあれ〻なる歌
しをふりてそあるやそれうへよりとの山歌の詞書以前を

わもなく出くとつ事のあるを所作ハきくとのこ得こ
世ときんの恋しきに向を出へきとつ世とのきよ出家をわ
世ハく出とつ伊勢物語のもこなとつ歌男つまとくをん
とつとあ世世外歌なを何なをしこれハ思ひてこ久そ
乃こを思ふ時ハんくこ一つなまと思ひてこけく思ひあへ
すくいひあるハくとくハ物をとくくへくるうつ代ものくたへ
きこそはりとときそこそ歌ものをつまそとつとのう
世歌世ハ世とてとつ世なくハ別こなるをひとつとおをん
事乃海しき事也とはくハ強き語りて外へあるこを
世なをさハ弱きを語りてくに内よとてこるこハへをくに何を世

四をうちうの乃違ひあり又五を形きの言をつまとて前
のるくきのるんやよりの引うるを業集の歌乃詞書より蔭
人よりはをとりることは内をうを形く出くなれ許より海のりく
よりあ歌とものるハつまをくそ出るの歌れ実をとをけをて書を
をるるれ心のつをて同こなるうをを海をちるふことちるも
金業の端を書ハ古と集よりくきくをたくくうきものをこのく
詞と歌とのるよ同しわをなくの海をを書をあつまりあら
す歌のうをてそ出るそ形れ恋しきのまりよんめも隠り
らハ罷なるそをんをいとをたとやうれ仲ををりつをこ女勢
ひをるをきうるををいハ実ハをのをなるる祢ハ詞書りハ

つを形く出くとひそうぬけ出るをまをいりまこうを
形をとつをなくとひとつよ思へるを藤五也やうく詞書
の内をうをなく出てといをとつを形く出てとハなく
雑くうのつをいハもうこのひもをりく云へしハ行こうり
女をハ又伊勢物語の男うをて女んとうをあるハ上文よ
祢んこうよ男ををけをとあるこハをうけくをハうり乃
んをうなんんよりこのひ歌とけく女んとうを佐よ藤義
をうつしてとやんうれし佐物をなくを女んとくけるハ何
乃事ともやうをハつをるくて女んとうを詞つのひるハ
れなんやをひくやとハ男乃あれるちなるを和よりを

いかにて祝者乃詞とゆかなはつきづかやとまさと男云くとあまた
ハもとより男のいふ詞をかなる事論あるべき也斎くハ擬議
まうくるへしとて今古流の様にむきこのあらぬ思ひつゝかけゆく
思ひあへぬさま也と細雑してうつそものをことへにひかば
なといふすなたゝハ思ひ入てかけくるべんとふる事思ひつうる
あらし又云山乃肩を流るゝ川を滝川といふ激川ハ岩のある
このれる水のあれ碎るものなるをとも終に平坦に流れ出るく
ことく一つにあはおもなる事所如くよまのせるへ里もとる家
を瀬を必山間なる所ともたきり流るゝ男川ハ之れ激川と
云へし又激流にてわき碎るゝ所なる所にハ其岩根を見ても

あへぬやうなく一川に渡りつゝき也終に平坦になのまゝて落あ
ふを待べきさに非也こえ上下に無を滝如く末に逢んといふに
ハきらにの外を女席なるを強く祝ふせんとする譬也へ
○袖堂云今こそ悼まゐる事ありて遠ざけさせるとも末のよにハ
うき滝にわけなく強ても逢んと也萬葉巻四に一瀬二波千(ヒトセニハチ)
遍障良比逝水之後毛将相今尓不有十方(ダヒサハラヒユクミツノノチモアヒナンイマナラズトモ)よりもいくおし実
也云く或説に本ハ序りそ付またハ伊勢物語に二はといふ歌
男わまつく逢んといふとあらんまで思ふにても浮く我ハあまた
終にハ日もなくしてもあはんとのさ也といへる事をわざ
なくしてもてなすとすがたハ志の也本を一向序とせんハ古歌

まそハ其論事なれと世ころ乃衒新なるハ害りある事
とそ心くつけ下しおきてなるへし拙ものハ古よりも萬
葉の歌とこと言も同しく形ちハおもし実なる道あるへくお
なゆとふへきハ皆非也まてハいのさまなれとゆ去なく強ても あ
ちんと解るハいりえいへるなれハ何とも其ハすもちなく不成事也一の人
まつく別ちる或ハ大方一の風つり中く古を也とゆまたるも
まなそのさのくこそ撰なる文せころ凡常也とて必席中まそ
ふるん実あるへきなまあらんよりや害りある事をそへてつけ下
し詞つるまの色あるれとよも萬葉をまちへくよのこ詞はかる
形ち也ハ同ことなけりもたんゆうゆと彼云のことをせけ詞ひりの度

あらんまも彼歌といふ言詞ハそこらの色いたらんいつく詞へのこ
く歌をや又ハ言へ嗽をきるとこハ嗽の阿嗽乃うさ早まること
えるも非也うをきをやまるとものいふ語あるへからんたやまハ
わとよる活み哉免の通をうるてはやまるはやむるはやめ
てとはたらくてにをはあ也きもやことひとしく思ひとるへきま
あらんさまとはやみのみもはやまり凡活りも実ハ操(フリ)乃轄
用りまて其本ハ同し語なからみハみ活りハ活り其格あのつち
らうまりて文ひとつのうらそる也こハ字のま毎あるをたれを
嗽をきをやことといへと事をきるをとといふたり事をはやまる
といへと嗽をきをやまるといふそれとうひの通てつきりのはやみ

世のハとゝ成ゆゑ也今乃世ゆゑ
早こと用言のゆゑ格ハやゝ絶たるゆゑ
き語乃こを解んゆゑ通俗の語をとゝさとすゝゆゑ
を水をはやまゆゑ也をあらまゆゑなゝ昔を今となき語を
まゝく雅ゆゑ事甚いとなゝ上ゆゑ一ゝ乃白やゝを向俗を
なとゝけゆゑ更ゆゑ乃ゝ事ゆゑ乃ゝ言を引て俗ゆゑ乃ゝ
いとゝ違ゆゑ事ゆゑくゝんまとゝりゆゑ世ゝこゝゆゑ乃ゝとを
ゆゑ乃ゝ言をゆゑ俗世の歌を雅ゆゑ人きゆゑのゆゑんゆゑ
や古言をゝすゝて古言を用ゆゑいゝて害ゆゑ事を
よむゝこゝをゆゑ事なゝのを

源義昌　又ハ義隆守後補ノ二男　従五位下皇后宮ノ大進タリ

浦ゝ島ゝ通ゝゆゑ島乃なゝくゝ島ゝゆゑく歌ゆゑ義すゆゑの関ゆゑ
金葉集ゆゑ関路千島とゝゆゑる事をゆゑるとゆゑ也浦ゝ島ゝ人
ゆゑゝ海ゝゆゑ原ゆゑ島ゝ乃ゝあゝゆゑ一ゝ集歌ゆゑ袖ゝゆゑ也浦
の関ゆゑゝゝゝ言也一ゝ歌はゝゝゝ乃ゝ旅ゝ藤ゝゝゝゆゑ使ゆゑゝゆゑ島のこ
ゝゝゆゑゝゆゑ関ゝん寄守ゝゝゆゑ思ゝゆゑゝゝゆゑ也須
磨ゝゆゑんゝゝ松風海原ゆゑあゝゆゑはゝゝゝ通ゝゆゑ島ゝゝゆゑ也の
ゝゝゆゑ必ゝゆゑめんとゝゆゑあらゝゆゑゝゝゆゑ花の白ゝ月乃ゝゝ
ゝゝゆゑ数ゝゝゝくゝゆゑゝゝゆゑのゝゝゝゆゑみゝゝゝ歌乃ゝゝゝて今を芝（サン）
あゝゝゝゆゑんゝゝゝゝゝゝ成ゝゝゝ須磨の恵

と所申て羽箒の里あり其ハ須磨乃図の説ありといひ傳へ
てすれハ宰氏の説とも見ありとて淡路島ハ羽箒より西
南にあたりて其海上の間二里に及ばずしかれハこの不破つゞひを
る濱千鳥のかよハん事いとおぼつかなしといへりまことにさら
は志る思ひよせたる歌詠乃推量の里なるべきにや柿考も不
又幾夜寝さめぬるを淡路寝覚ぬらんの略也とのミ解るハ以て
非也寝さめぬるハ寝覚ぬるやと問かけたるこゝろにありて一の
むかへる語也寝覚ぬらんハ只それとなくて思ひやる也清輔卿臣
の幾世に寝ぬ此のこゝろにも幾世をなりぬ
るそといへ也ぬらんのことにあらず

○按に續後拾遺集羇旅　中納言定家　旅寝する須
ま路に絶えずすまの関通ふ千鳥の暁の声ハさめて旅
寝覚のよしとこと葉にあれハ只堀河院後度百首の作者なへこ
るまで歌の手ハ京極黄門一人の本歌とせられたるにあ
つるく旅の歌としもはかならず其百首黄門の撰ある
さる事ハ編首に安き濱千鳥のしかしながら本歌にせられしハ此歌撰
集に入りまでも志る世人皆志まる所也とりとてあしき所
をとる濱つき歌ら加へ詠に思ひとも思ハざるとの可まる事
に非也いや作者の優劣をしるらんや又須磨の浦にも島を
よむに勝るの難しきをいへ源氏物語をもとにすなハちといへ

先にいへるにたがはし
㊤初学の人此歌を古人のよしといふは秋の夕暮に述懐の
心を身にしめて見つゝ衰をかなしめる心といふ感
心非也何ぞ此歌をなど述懐をよそへるものとなさん鳴呼なり
鶯燕桜を見ぬといへる鳴音の目を見ずしてといふの同し
ものと思へるなるや是はこの歌を何といはん古人とものの歌は集
中にてもすぐれたるにて新調の心をも以てきの非也
左京大夫顕輔　又ハ顕季ハ修理大進隆経ノ二男　太皇太后宮方ノ左京亮
秋風にたゞよふ棚びく雲の絶間よりもれいづる月の影のさやけさ
○○○
新古今集秋上崇徳院に百首の歌奉りし時よめる此歌

二句久安百首にはたなびくとありそれとても秋風の吹て
よる村雲の絶間より漏出る月の光はいと清く
さやけしとの心を思ひ知らばいとゞみがき出し鏡の
ごとくかゞやけるに照してやさしさこゝもしていとめでたき歌
也今の風ならば新古今にいれし頃の時節のやうにやは
んとてさやかなるはこの上なき白玉などの如く
なる月は在_二浮雲浅処_一明などいへる数の詩よりも優れたれ
てさやけき月を面白き詞しめて此歌のこゝろは
雲のもれ出る月の影といへるは強き調子にて風にきこえ
る時雨を集の漏出るなくては本末の風の事也落ちるは

桂川くもさなんや四ト百ちよ清輔朝臣の おもつくり孫し
ろもろのうら葉をひもとくに三代集の名ぬしとよまれしうひもな
ほ一句ことにかありてあらきを同集よひもゆ山ゆくな
ほうく入らまこうり三代集に唐衣ゆ名の雲ゆと古歌よこのき
これ見てうく歌しめらさるに名三代今きをさへ先たちまてく
いてく消ものたくひ事世歌と同しきものをてをしむよこれ
見たとひよ和歌とも見てうみんの歌をいろへうこひやや
いとわろく歌さんをやら

○改観云一夫時ろる我の身をいまひしてめ御和をわと
めていろあらきこ云風雅集後鳥羽院うひたれこよよ

中月月けいさやいきとりもあたまもたり同集清輔朝臣
ひろすに厚ひもそそ村やれ時るそ月を時まあそる
けるは両首ろてろ今の奇よ作り清輔は又れ新古今
あるそうくよそうつきたるるといるに非也身ものでもと
必一夫時ろる我のそまをのこいんんやうりてそる我れ
まれなるつーされいしもことそるみやるれ身をとそとあ
出ろるは非也夫方常なるけーきなまは也ろ必をありく
也ろるけーきなるんるは又雅のんるはよまそんんりより
清輔朝臣も父の影をあそうくよそうつーるにあらに
やる月の月をひとくめてそまそるもそれとそ父の時

門院ハ冥院
ち綱ニ公宣卿
ノ市町ノ家
陸ノ后ニ聊
ヒ

るあしく世ちの人父乃時れよりの歌ハ又おのつからてうを
ひらきを四ちてとの事あるこいとるをこをてうをてうふとこう
つきをといちく世ふまくとの歌ハるくしく

待賢門院堀河　神祇伯顕仲の女

長くらんかをしくしく思ふれみてきくたゆめをこ秋おとへ

千載集恋二百首乃内恋をよめる時忘れてこるをよめる

あをを世歌初句久安百首ハ長うあとるをそ四れてるたのんく

きうあのともちくしく名をこうるあるけこしをわされをそ

えをいひきあおをのこ思ふことをちまつけなるわををのを

を立うりてちなこうるを世まあることれを誓をやこうて孔をそ

の抱とーたるよあのつくう後乃ときを思ひやーまをくすをと

なしくけこうき歌をきうあをを載集ををのんとして

ハくれうハの優なしくとてのさうこりかくくを未

なうくこのうんあしれんのたをもちくしくをけやうこて

ちすをとそれをなかあをうをあるをこをうを

をよくこのれをあ所あををれハ佐藤祥まをひくく一言をを

よ以をを

○改観ハ起ることれくいかー男れ長くわをるを涙しをを契

をあきこれハ世んをーみーやく久きをハ思ひをくいくハ

非をのくを事歌のををこの事なー又云をうるあーと

きこえぬるも殊にくゝしきものなれども歌のこゝろ
なりとて云ふといふも非也こゝは哀れ世さうゝめきと
ふよりおのれみてるくるまあるこのあるまれやさこゝろ
きんこゝろとて也

○初句のよゝ乃一こゝろゆゝしてこゝは長うゝん事を思へども
男のんれあれつゝれくゝ後乃解よ思ひこゝろこゝろそ
とあれをえらるとゝこゝは非也男乃んれあれつゝれきを思
ひこゝろるゝ事此をる事既よりこゝは涙を伝ふ
すてひこゝろ思ひこゝ也又長うゝんこゝろと
きこゝとまを長うゝん事を思へとも解ゝまあるう

んや長うゝんを思ふるひとのんなり後へとう事よ
ふてふをはなりてこゝは思ふ解へきる非也ゝ世物白化
乃ゝれたるひくゝてのなりゝ海よりあゝ歌ふ解ま
とゝり

後德大寺左大臣　沙汰宣定　大枝師門左兵衛公雅公ノ伝子

ほゝくきゝ鳴つるゝをなのむ山ゝ峰を出乃月そのこゝ海
千載集夏時ゝ郭公とゝ云ゝゝ歌ゝ伝りゝ海とあゝ
初ゝゝ云郭公乃そゝ形こゝ鳴つるゝてゝんやまゝ乃ゝ
れきそゝるゝ海の月乃こゝとゝゝ実よゝきこゝえ
く郭公そゝとゝゝゝ南村最者一乃海歌とゝ云ゝ

○改親の雪より後時しく咲方は一あり咲つるはおとろき
てとゝのつるハ色こそ

道因法師　文八治部卿俗名敦頼法名信下右馬助子

思ひ侍るそもゝのちハあるものを長くよたへぬなこそ
千載集恋二題しらず

こゝろ行そもそもあるものをえも恨まのたゆあハ消るもくり
と思ひんくのハ恨ちんする源わたりてさも形まをとこの恨
しむこゝろいつわひを勢ひのせん方あるくらけ
ん氏屋まるをいゝ萬葉巻四の念絶和歌函拾尾中く
伊幸若相見姫為まこと遠有者和歌而も有乎里遠顧

聞作不見之為便太古今集でも今しはと侍みーをのを
さく鶯氏家よりの色家をさのむら侍さつる時さへ
きハいつこを思て上源ありしんなと流為よりの色本居思
ひこそこゝる迄萬葉の四ひこそといひ和語よりてな
とゝつるよ侍りやとハつるなりめくまるをとといつるて輪
廻曲なとの字をわとゝちまを名くい和名とはこゝきて
綿腸湾なとをわとゝいてをとゝ氏まるのことちよつきくい
つりまこゝてまこゝまるなと皆をこるくーわこのたのこハ
今無をひこそわひわるハ其和よりに氏言のそちまこるを
てもハこゝしこもつこそるまてもあいあるをとゝ迄思ひよ

安元二年九月出家
法名釈阿

ゝりたる方なきことなりとそれあるを命ハなりとくるを其
うきを涙ハつゆ[illegible]ことそ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
○改朝てんいうきさ嬢ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いつゝ非也こゝ涙乃をきさとめてくゝめの若まとの
甚なることのゝりれきをつゝくゝそんとて家ゝ[illegible]
思つゝをとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
よ甚家とゝ進ゝきとのよゝのゝ[illegible]

皇太后宮大夫俊成　住中納言俊忠ノ三男　母伊与守敦家女

世中よゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
よ載集雖中述懐の百首ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

よゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
さゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ひゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
の事也初句ハ世中よハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
せんゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
さゝ[illegible]

○改朝てゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
俊成卿乃世の中無道也と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

それゆゑにこそよろづなりしところ世中無道なりしを歎かれ
んにハ文道なしともいへるぞよのまことならん其性情をのべんは
世の思ひん憚りをもうつりあらはしまおもしんやうらん新古あるを
も勅撰にハ憚りあへしところ当時の集にうら撰に入つきまり
あるいところ文学にひろめん百首の中にハ述懐あらんうらよん
あるべきなりといはこうつしこにハ形てふものゝあはのあるをつゐにまで
おもやけものに思ひなしうる也 又云古き集に世のつきあ
あそえぬ山路へのむつまハ思ひふへしそおもし也ふ寿まおもし
今あといへる彼山路をおうりて思ひいれんにハともへまあ
しまりといへるも非也 世中にあるべきなりともおもひこと山路

といへるハいかなることにも道ある也道なりといひ世なきかいろの
深き方のあさきをなすもいへんは同しことへ也せましとは此
山の奥にあるまいハ深き方のゆかりもてとをまつハ深きといふも
くまうる此言古きの山路にひきしいかんや
◯初学の真学を道も位つきなるを山の奥まても思ひいれ
とあるくも解うるハ非也こハ山の奥こそいふ世をさくつきなる
これと思ひさだめてくの心にうちおいとしへる也位つきなるを
山の奥までもなくといへるに山なる世なくをもとめやう
てつひにハ山の奥までまよひ及ぶへしといへるは深くまどうろ
藤原清輔朝臣　左京大夫顕輔ノ子　歌学家　奥義抄ノ作者

既ならんかまこと世ことわりや古代ものがたりとみるにそれとは反しまた
新古今集雜中歌に家集のいはゆる思ひ出でまほしきころ
三條内大臣のまこと中將のくあり合ひ給ふ時つねにあり給ひ
の学問は生まれつき内の三條と称へ奉り大臣實行公教實房
内の三位中將おもひ出でまほしくこの代はかりなき学問の中の實行公
中將を孫の内の公教公の父母の交らひいなり
こまかにあるしるしや教業記は朝臣はうつを書あひし事一所
もとんえに実房公をこそ世にもてなしくまし
ものしのひんとまと世公実將より直に古大臣みうつを
孫ひとく内大臣と孫の内の殿これをあらはしたまふ文

一本に三條大納言とあるはこれまことにあらずやもと實
房公の大納言のそなたおもしをしつ時とすべきは十二歳より廿歳ま
で中將のくおはしけるは甚だ奇なるの事なりとぞ侍あまり
なるのくれをするなりや紀氏は四半家條を老まおるとうの
ハさぶ中歳きやんんのハ紀のなりさてもとまと紀氏
世公八十四歳より頭をさへ剃ひくる事は常は蓋なりて八
おもてをこそ中事墨時記をうんくえ一四つ世紀の公の蓋
まはいとこちのひとこはこのりはゆりあまはおもう陰侯きう
まくはかれ佐大夫乃つうをあるらはしまなく彼紀
うるこそれは親しくはうひかこともたのこまあるうをも

事編かく中將まさ[illegible]
記りよ安元三年七月廿日丙子晴こゝ今世清補始任頼滅こゝ迄
代長和元年寿也年来迎剪[illegible]傷立[illegible]可[illegible]
きはあらく弱ハ往ハ学ハ[illegible]
しそ学ハ[illegible]
きあひしとやてこゝ中將ハ[illegible]
何言ハ載集ハ二ホまそ[illegible]
おハせしこゝハ[illegible]
くハ学ハ[illegible]
とこゝに中やまたるみ[illegible]

きはまた弱の言やくこゝ[illegible]
みゝ[illegible]
ちこゝれんこはりうしと[illegible]
をといつもこゝ[illegible]
やゝ例しなきやこゝ[illegible]
國をこゝ馬婦ハけゝ奉や[illegible]
孔ハ[illegible]
ひハ伊こゝのやもあしぬこゝを弱きあまりそ中將の御を
とハ同えこゝれこゝる乱まこゝ彼家集ハいゝ思ひ出こゝる
こゝとやこゝる語勢乃ゆゝひこゝるをこゝれハ保元平治の乱を

一切よ和こゝろくとれうきはなりうしとゝ人ゝ世をとゝのへ
ゝ時そ行よの世を治つゝ乃世をさせるゝやとも世の後勤を
まつゆめ也

○改観ゝこれハ白氏文集巻十一東城尋春とゝ詩ゝ老色
日上西観時日ハ今既不如昔後尚不如今と作まゝ世後
の二句をとりてよめる也其中ゝ初二句共こゝ侘をこゝ
世中乃おとろへ行ゝまを見ゝ終ゝ侘うく形ゝ言也
とゝへゝハ此朝臣の博才なゝハ中ゝとゝ文集ゝ世ゝ悔
あゝんなゝまゝ人ゝこゝ行ゝよまゝるゝあゝこゝゝ引ゝるゝハ
文集ゝ東城尋春とゝ題ゝ言古詩乃ゝ中ゝ人ゝ句也老色日

上西観時日ハ今既不如昔後尚不如今と作ゝ末ゝ毎
中乃可何ゝ時ゝ伏愛出酒後尚能作狂但忘此興亡間日
流東城春欲老勉強一来尋と也ゝ世ゝ老の
くを歎きゝる侍也とハ世ゝとゝ人ゝ世ゝ
中ゝ世ゝ世ゝこゝ人ゝ世ゝ
を歎ゝまゝゝる事ゝ和ゝ世ゝ
乃おとゝへ行ゝまゝゝゝ世ゝ
解なゝゝ又今ゝ世ゝ
なゝれまゝゝ世ゝ
ゝゝまゝゝ世ゝ

いはゞ果して餘情あるハハやく清拙にしてせまりたる方すじの雑子
見えしと見ゆるも非也これハ眼前にして景をいひて言つるなれバ有の
ゝる甚き句へ切迫にして餘韻あるまじ歌をいへる中よくいはゞ果
つるハやゝのこく餘韻あるきの澄なしすやさいハ餘情ありと云
つきにて非也情を盡と思ひといつきしとハ詩の老色は上面
云く此初二句ハ言元云外にこめ有曲と思ふより餘情も
あるやうに思ひなさるゝの也
○猶学者云此等ちの大体事ハ人の常にて云く白氏文
集にも老色は上面云くこれよりも情を持たんよりかくいさく
ゝ理屈めき且物になつかしきて由後世ハいつて深からん

なほ思ひて作る歌にも作り滑ても言ふと云ゆるにて
泥こうりと見ゆるをいましめしきなりすやとふるハ非也ま
つ世をうれひたる歌を人を欺きて感と思へる様ハよろしく
無きりまじ理屈めきて物に泥ミすきうりなとといふハ
荒陳にはうしきて彼詩によれる也と思へる故也これを学
者さま思ひ立てもまて猶も世にある也悲しき歌を作りいましむ
しきものとかんで作りえてよる也言とまで向ふる也人ハ為
まじくも非さけなし接きるに思ふ事あれ此事を述きハ自然
に其歌也とのたまへる世朝臣の歌なるハ彼古人に擬す
る也まことに此すなのことと思ひとまた感んすハ円滑とするもの人

なりけらし

俊恵法師　俊頼朝臣の子

よもすがら物思ふころは明やらで閨のひまさへつれなかりけり

千載集恋二恋乃歌とてよめる物思ふ時は夜をもなかく恨みて物思ふ時は
ハ更に明やらぬにして今の夜も明ぬ閨のすきまさへ我に川れなき
なきをも恨まれぬまでに我夜もすがら物思ふのこと待ちとのあ
やふく明かん事しをわるなく思へるけしきを此作者の歌
ハたとへつれなきと常にいはれしにのなり

〇改観に外につれなき人のありて恋に申の思ひを表せし
庭もしらぬ事をあらはすに此をとへるハ非也恋の歌に表

をすゑのる物思ひとくへハ甚な恋る人の心なかるん事に言を待へ
るらハ何そおそくも末の句は閨のひまをも待そのちさに
人ある事にあらず又是れハ閨のひまさへといふ事に事よの恋
人乃つれなきをもきますとハいひつべく物おもひを詠しれ
ぬ事をあらはすとハいへるハ又三句を一線によりて明
やらぬといひけるを非也とてハ明やらぬ閨のひまとつゞけ明り
てすまへる秋冬なとのさまにあのつゞるに明やらぬ事
と成也上に物思ふころハといひたるにてこつゞよな
まる也こは夜の長短にハかゝはらず物思ふころゆゑに明や
らすといへるなれば上をうけて明やらでとよまるべき事

俗名ヲ佐藤義清ト云 一説ニ則清又憲清トモ云リ 宇治左大臣頼長公ノ台記ニ義清ト有リ 因テ義清ヲ正スルヨシ日本史ニ記セラレタリ

論なきことをや

西行法師 父ハ左馬尉康清 母ハ監物源清経ノ女

なげけとて月やハものを思はする かこちがほなるわがなみだかな

千載集恋五月前恋といへることをよめる歌也 歌の心ハ
てハ月ハなげけとや思はすへきことならねども月にむかひて
ものゝことにおもひ出られてかなしきをかこちがほなるわが涙かな
ことハ月ハ心なきものなれバかくハかこちぬる也 かこちがほとハ
前まぐさきをかこちといへりそれ故ハ何にまれかこちて物をいふ
てひとかたによむ此歌ハ万葉集にかこちとも詠
るをかこちハかごとかへきもの也

ましきハ中〳〵に月にかこちがほなる物なれバかくといふのまし
き老の稀なるによしと見えしも涙に浮ふ帆かけの勢ひ也
て今よりかへしかこちがほハかこち顔かこちめくといふ
あとハ此語をいふなりいとめづらしくて古ハ此語を詩勢に入れ
ハ必ずこそかゝらず源氏松風云むかし誰のこゝろにみえし此位をかひなる
をさまなと語らせたまふつらさもよしとまうす
とかましうきこと位ふりしハかりてこゝろに涙なるそ
わか此かなしきにかこちがほなるかなしうき昔のたゝ
まし此後ハ語を又形此かなしきハかなしきハかなしめく
みるくやうすをまもいひとぞかこちがほなるとかまへしきと

の德ミの綾名あつんてら妙へし舞ひ拔出流ミ今世の上用
を兼てさ限る所さもハうちなましうり是らくハしくもせらるゝをあ
らん者はやく流氏なとのこゝろにハよろし一つのらくさ流一のミとま
とうつまちお形人点しきを伝也月かくけなきハこゝれ
うもしてむこゝ洞ちとしも句をしつるむこゝろをのりてとも句こ
此言す也ハ非也ともんゆるハ今をさまめくくきくてゝむろミ以
ならし句をてれハ人の声ともおもふゆゑ又服うそ申すのをしゆる社
の風とこの句まつゝろ服うるれてろちへのミころゝべき延あるべき月
をミ流んきる手を暮ふしくこてよ色紀うるのえ濡かの種の風とも
よ句まつゝろハ同しむあも勢ひありてせゆゑハ得る言ともあり

ひろくせさ也一つのかんまへかくに又さ取るへくよも勝りてかんぬらむ
をぬうねなとハ六さ流をもせしまうまうを又ら流まう也ことま
の同し人里風るたゝ又ま也時乃郭公きゝくほりて又なの
らせんともまのまゝしなどすれバちそれ也
○初学の人のむつかしハ懸託（カケツケ）て言をはなれて句なくおもふところ
つけころいふこれ也古今序のむ形きゝれこ秋のよ此長
きをむこてまハ後撰のかしをのなるともすゐもとけあく
まむ流のことハうけすをあらなんてゞも同しともいふ流ば
非也古とれ序のむてまハもーのをことゝもきの納也実ハ
むとつまハともなる手を清めてふそのへくなうてつめくろ也ひや

ものをいひてうちまつをまつうちなるへ
ものゝ図格をそめかつけを省さるに非也後撰のもうの意
寂蓮法師　俗名定長　俊成の嫡子　定家の兄也
むらの雨の露もまことひめ松の葉の露の露のほろ松のゆうを
新古今集秋中五首載奉也久保ときさるを一むら雨
よ中ぬまてくいまこ露ふるゆをこのめ松の葉の又むらくも
露氏立のかるゝん異山乃松を思ふ一初句の出言氏既り
後拾遺よ俗とのるつゆをまことひめ神のうへとなれ〳〵しるく
そゝもるりれしとよとこつといりさくく露をのそをやん
ものゝ露をまことひめ乃一句こまやうふくあまり自迫おそて

北別当
皇宮亮
佐隆ノ女

ちすまとゝ又生来ふつこやまれ雨後のさまはこゝをとゝよ立
乃ちるゝ一ゆれ雲傍馬頭生なゝ思ひあらすへ
皇嘉門院別當　法性寺関白忠通公ノ侍女を仕へ奉リし女別當
雑後拾乃ものゝ和氏一よゆをかをつくるや忘るゝ多つき
千載集忘こ摂政古大臣の時家氏別会よ旅宿夏忘いつる
んをよめ法とをたくゆりそめ年氏一夜ゆをよゆを恋
てを夏忘やるこ法へきと又ハ夏まりき悲しきよほゝ
ふをるくゆ思ひふゆこふあくまを去生るる迄初二句ハ一秋
といたん年をそくゆをつくを漂標よせこり改親よ
ニ世のうゝ松ハ苔をゆりる船よ粒一年氏詠るを俗歌

内一夜とそへてゝとゝいふり初句を三雅波はとゝいへ中比の世の
あやゝ江に神崎磐島なとの拾遺あつる事とも思ふ人ゝ
ゝ引御なまへ世房氏引ゝてもさらこそ侍をあつ人ゝなまとゝ
前の撰を思ふに兵旅乃有まて思ひうけぬあひとをゝ意
野ゝ一ゝとゝいふ也

○初句のゆゑとゝいふものゝゆゑとゝいふ同ゝ心くそまたゝ
うゝとゝ言なく伊の古野を世ゆゑ也とゝいふ人非也とゝのゆゑ
とゝいふ兵ゆゑとゝいふ同ゝ心くそれをなゝとゝのこゝ注
くゝいふまた古野とも解はん事いとあまりゝ世ものゆゑの
後世野のうへゝいふゝ事とゝこゝとゝ又ゝ世を

つくゝ人をあをとゝのをゝとゝ恋ゝ世の世ゝまてとゝ世生
満ゝ元良親王のをを世ゝてゝ人ゝを拾てゝとゝいひ世を
世ゝてやゝ人ゝまてとゝいふ世ゝとゝそゝ人ゝ忘ゝ人ゝ
言世ゝとゝいふゝ人ゝ日本紀ゝ伊義撰和歌選稱答
能撰劉駅劉母萬葉巻世ゝ多紀之左ゝ布伎美我須我
多乎和須礼受波与能可藝里ゝ夜故悲和多里ゝ奈
ゝ人ゝ世ゝのゝとゝくゝとゝいひゝあゝきゝりとゝある皆ひとゝとゝいへ
る世ゝ非世世をつくゝすゝ人ゝ一つを引ゝ入ゝ侍ゝ世ゝとゝて
伊ゝのゝやゝて恋ゝ人ゝをゝ世ゝとゝいゝり世ゝを世ゝくゝす事
なゝんや恋ゝを世ゝ世ゝやゝくゝ世ゝを世ゝとゝそゝ人ゝ事紀

の世のことをも萬葉の世代のことをもとかまほ
しを絶るまでに代々の事を編ずることを世々の流の引出
るハ何のためぞ〻ろそなを思ひ〻んを思ひ〻ものとも
さめ事ハんをいふ〻事也元良親王代々の歌ハ世を嘆て
をんとはきこえれハ世を捨てとも宣ふ事毎を結へ〻う
す世満ぬ世を思ひんなり〻そハ思ふ〻ふ言ひそえ
とハへるもいとをかしゆを尊て思ふ〻ん事仏の教ひ
ふあ〻んかく世をあ〻て思ふ〻ふとハひ雖〻こハ世を
思ひたまふ者のをふる事とて後えく死く後悪
つ〻〻ん事いとまなしと思ふより死ぬるまでとのき

まろなるべし

式子内親王　後白河院第三女　母は従三位成子

式子内親王の絶ぬハ〻て稀なるべ〻ハ思ふる事代よりをそ
新古今集巻一百首乃歌の中に思ふこと後をとゝまいこの
よ家ゐの後よりそてもなんと形ハ思ふを結ひ形ふてあ
らへなハ必ものひよりて涙ぬむ思ひ乃世ふあ〻ふまの歌
すると述者をゐの後ハいふゐたまひ述其魂のうこの
出る事あるゐもとひこの後ものもより思ハいて述ふ〻よ
思世をへ〻まハいて魂むもひ魂とつめなる思
ふへ〻事ハ仏のそても事そへ〻連続せるものをいふ稀なく

国立公文書館
National Archives of Japan

たまのをもいきなりへゆく魂魄をたやうにていきをす
るかち息(イキ)絶ともいつまでさるハ猶をを君くなるよまして甚
敷をやうへるよりもをそく凡そ人のいりてをとなれ緑りなく
よみあるいたまつまでさそを敷まさるハあらう先治をするて
ひをはをとくハ火よりくハ焼る事必定なるまとあらう
めいさんのハ火よりくハ焼をそするとやうなるくく治をの
勢ひをゆるふるハいまこ焼さるをきなるまをもこそすまも
これは図に推くしるべ

○初学をきをそするを或伝なを治をれをいるハいのたこと
ろはをるるやよりも敷をするといもくをもいふ一毋の治

をそくハよりもをよりつらぬこの中を敷ふ言とうのをろ
又ものやをんとのひてもやゆるよりをまとやるを事のをけのそ
するとをるそをきをとのるハ非をよりもをそするとふをを治
ををとをるハをそするといのんも治をなる事偏なるきをや
伝をそ毋乃一言よりもをよりるとの二川をこの中を敷ふ言ハ生
をくをき毋の助字あまこハ語勢ふをを図に治をのをるく
法をめくまるのを更に敷ふ言とくなまるるの非をを或伝あを
まりを言に又ものやをんハのをとの敷ひの何をを濁ををを
なあるく伝をきをゆるよりをるをんいををハ焼
るを事必定なるを焼ものやをんをあるくハんやたるを

門院ノ内名
亮子
此ノ間ハ父ハ
院ノ五位下信
家卿ノ院ノ
宮ノ内ノ

たゝよとゝ者をとゝのよいとゝるハとゝのゝりて
の世をとゝとゝとゝとゝとゝ又魂ハ者とゝとゝけるも非也いの
ちハ身氏内ゝとゝて事ゝ
ゆゝくゝゝゝ魂をゝ經ゝとゝゝゝゝゝゝ氏稱也ゝゝハ長經を
をゝくゝゝゝゝゝゝ

いうこうすると世うの他ようつる意あり時いつくきるあうさ
まゝあのつうこまるいつる侍なしそゝといひきゝうけくゝ百よ
首尾歳巡まる語のまゝ巡まゝ紀源の事昔よりもひあう
し侍まゝとうけ雅事事也あのゝ現ゝるゝ事なく又現ま
ゆくる事形一古人血源ありて今人なきも悔ひ叫うすや
昔といへとも別ゝ幾ゝあゝ事まゝこのけるものまゝ侍擬
の通服集をはゝあ源乃文ゝ人ゝえくまゝとゝよりも他也
なるゝ源事あゝ人なるまゝ他ゝするゝゝ禮記の檀弓ゝ高
子皐之親之喪也泣血三年ゝ孔子曰人深源必周悲聲
而出血出則不由聲也子皐非悲無聲甚淫血出血出

故云泣血とあるをこれハ叫こうるゝ実ゝ血乃出るをいうゝ人
あゝゝ源也まゝるゝゝ源事ゝ叫うんゝ人ゝ花あゝきゝあゝ
す詩経の亂思泣血乃義泣血無聲曰泣血とゝ乃周易ゝ源
血漣如とあるも甚事なゝ又韓非子ゝ和乃抱其璞而哭於
楚山之下三百三夜泣盡而繼之以血とあゝゝゝ寓言ゝ
まゝ人ゝきゝゝ拙ゝ源ゝ今の都ゝなゝゝ仏のゝも唐
ゝ唐ふうつゝゝゝ彼書ゝゝ仏あまゝ又仏ゝゝ実ゝゝ
ゝゝ別ゝゝ文ゝゝ用ゝ事ゝゝまゝ也ゝ大ゝゝ
ゝゝ段乃ゝ源ゝゝ紀乃源ゝゝ神人ゝゝゝ
叫別ゝゝ文ゝあんゝゝゝ源ゝゝゝ准ゝゝ源ゝゝゝ

ものひ形をいしさ彫ひ常ものたとへハ神ハ海棲ハ
とてをもとよりあるべき事なるべきやといへども
なまるべいやのく海川のくちあるを蔡氏つて海性やのく
魚のさとりつゆすれども伝ものひとまてるハいとうな
るを海となまり川乃やうといひもあるものハ明りそあ
形をもこれを形ひ魚ひとりとひるべきりさ海種ひあ
らんまたいひる家へ形ひいるよひ廣ひんをそれたこ自然乃
時のく伝り伝るよあるハさハそれひ誰をあるをとやるを
めり血乃涙のあるハさそれひうとく中くそれをもるこ
さ海くハ世ひ絶ひく其種ひく誰を見ひるひ事ひあを延

こをひ多ひ人乃中ハ事ひあるんをもそれを他と
して海とこるのハよこ出ひさ事なるんや同時の形ひ世を
形けきゆを見こてもなく海ものなをハるひ伝くを
さへよそこをこそ色の洞ひ乃こ用ひる事たあやしむい
よりや血の海とひるハ形容ひくいひをもるん神の乃氏家ひ
なを形乃人をもるんへさるよいへんを事ひあるすの形こ注
血とひるハるハをもよりを世間あるひ一家なくくく注をいをと
ひるハ故ひけ雅一思考あをとをふをもり

○初学ひ世あをもひのそをまて在ひをいをもあをと見初
ひひあをもをいをもるをひくをるひこをひるひ形也

いとをかしき所侍とのゝ人をあつまへる時
はぬまとのそぬまとてゝ人をかたらひ給ふ
わゝとなるまはゝゝくをつてなまりとゝ
こゝゝもとゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
より又いとをかしきうぬくゝ
わゝとゝゝゝ
よありとゝ再び句なるんや句ハ歌よりていとゝ
後京極摂政前太政大臣　御詠　良経　市文八後法性寺兼実公
きゝもてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新古今集秋下百首の歌奉り一時とあり蓮を鳴ありて
寒き霜夜の庭に叫ぶ社をうゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ようゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伊國侍　吾妹相伝受　浦丹衣　数一鴨将　萬葉集
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

集はもしろくあるべきことなれども歌のもよう勢
強くまさり岩根の水きよくいでて玉を敷席のひろけ強くて
そみつくらんと強くあるべきなりつきされば世界のわたるふこのれひ
しろ世界の意にいとも人てすべし又結の歌とてよとて強くまさり結
の歌とへはまとてそろへ意の歌とて歌ゆきされと大
うこと古歌とおりまへすこのうたけこのゆへ一句をこの萬
葉巻十四結界之寒吹たる信濃屋前之海苔之本蟋蟀鳴
毛図巻蟋蟀之吾床隅に鳴作本花起居管君か意か右ふ
傷に云く蟋蟀を萬葉のよめる海苔作本花起居管君か意か右ふ
を知るおのれ蟋蟀一名蓍木里木里須まこと情例古保呂本と別に巻こ

又張ちり字書に蟋蟀似蝗而小正黑有光澤如漆有角翅
詩豳風一名蟋蟀一名促織とのひまこと情例の中に蟋蟀と同
しきよりをいりとのを按まるふこれるきさりくれハ図経
別品のくこほろきハ蟋蟀と鳴く今之俗よこれるきさ
いつきりくすハのとよのを床下に鳴く俗よいとくとのり今
又ろに野に鳴ハ大なる床下にとるハ山地野になくハ萬葉巻
十四蟋蟀之歌結夜来庭験母枕と吾者とあるふこのるひ
てそのあひとすなるうふいう実に扱うまこしけ也こハ
野にすまくあちこのくを鳴也とるハ萬葉侍経をとりて其
おのしきとるこ又のとよのを床下にまこてなくハきりあるる

しそいとせたうう夜せとう風新なさあうつひくせて
後つてせとさとてすあれ調をよくれつせ今京まそたうう
いとくとのとうつせともていこれ春より出雅さそ
再様中海の甚又つ不ついハ野のあるせ所ふあるせ皆うう
ろきとのひくきりくすとてハはこあり氏一ふうくすれた
ち波須なり四全みうう今せきりくすとよ山西うす世考
あまりうくくしう事長位ろまハ俗ろゆしは世
○初うの歌ハこれ古歌ろ意をうてきうと全く萬葉の
歌のまと用ひらまとうるよ世くつけはくいううれあと
なまとうこれハ世うれ常れ歌のさまなるすいとすうまとうろ

後鳥羽院御形成ノ方ヘ
当院を仕官ノ
如序

せといううハ非也皆古歌のこ同ようくうまのるせまくて古
歌ろんよみつうれ抑となんす事あやしむいこハ古
きすうこと歌とのこたうとあるせも思ひるをろ私
の意なるくーこれハせんすて感ふうさも古歌のせろ
うよハせうをハまとれ歌ろとと思うり者ろ所ろさま
なうれいと侍まてうるせとろつうとて其者のほうて歌ハ中
こめてうこうもゆうく侍せと其常れさまなうう侍まてん
こうそハまとと其人のうきさ歌ろうあ者れせうこと言せ
ううハおのう真んみうせうる事侍を侍へうれ

二條院讃岐　二条院御諱守仁　後白河院第二ノ皇子

泉殿は海を平らにしてなぎ沖の石と共にかくれ
千載集に二寄石恋とよめるこれなり
泉殿にては彼沖中より流れ出る水を
くんでそれを用ひ更に四日くまなくまたしてく掬ひとるに沖は
四方にしてしるあるに泉殿は孤島にて沖の石といひすべき
三雑きこえもなく沖中にそそるる石とも流れる石とも何とも
見つまじきものとよめる例となり故の石とうるはまるべ
きくはいとそれまく光行の東国紀行に沖の石むらく海干
にいでたりとかくと書しは現に其あとをたづねるにしてまた
是なるのこなるべしかかる耳あまたうる法の事也さてさる方

乃証ひよりもとこそよいひ試むつきまた伝也若狭國遠敷郡
矢代浦より七八町ばかり海底に大石あり昔より沖
の石といひくく充舟人乃舟隠をかくまんとおそれてく清
さこれ所ゆえにかかる也今も土人沖の石とうるひるまとり
さてそれ矢代浦は永暦のころ海二位頼政相模庭にて怪獣を
射ころ賞に湯殿山食色也とのひ伝ふ称やくより同郡
なる松永東郷及宮川保を領ぜしめて其舊址今に遠き
世といへども八平家物語に若狭の太宮川を紀行さら
まとうる事見てしまは証にて矢代浦の舊号を稲
富浦やよひくく始八宮川保に屬せりともいつまでそ其後老代

彼郷の如くのまハ寄石京の郭より思ひよせくまのあうつ石な
き所おもしろうさぶをいつるなんめつ学ゝもちるさ事なら
んゝハかりめてもよこ出へくゝや那伊之の迦に為る神の白石をよ
まゝきゝ石寄り因縁なる神の御子石をよめるなと因縁ある
へし或説ニ大京図ゝ宮内権大輔重頼子重光と云ふ傍泡ゝ母
ハ信三位頼政女二條院讃岐とあるまハ後ハ重頼の室ゝ云ふ
いつの比東鑑文治四年の所ゝ若狭國杉永宮門保の地頭宮内
大輔重頼と京中二ハ重ゝ見えゝ云ふと保をく思ハ頼政も
てゝ領ゝ云ふの杉永庄宮門保を母の実地としてゝ婚なる
重頼ゝ強興をゝ化しゝのやあんゝ又ゝゝ一奇説あり言ふ

永の須なるもとゝ彼宮門若ゝ一堆の古墳あり古和ゝ言ふく
日光をさゝへたるつものみをゝ云ふを患く村民ゝの杉樹を伐
んとする時いとゝ恐ゝきゝ塚のゝ如くあゝ吾ハ
信三位頼政ゝ女也年ゝくゝゝ伐事なるゝ怪ひ
て消失あゝとゝ云ふそまゝ云ふ
伐へ伐り彼此を思ふゝ此伐ゝ石ゝ神の石とゝ云ふ
思ふてくく事ゝのゝ云ふあまたくくしくいふるてさ
らゝ来哲のさゝを拾のこ

福倉宮天尼　宮朔ゝ

宮中ハ云ふ也ゝ此法ゝくあまれ小舟乃法ゝくこのなゝ

新勅撰集羇旅部しに云中ハ赤石のすゝ者なるあまと
あまを今世俗のなきと清ゝ海士乃小舟の綱を引さま
ゆふしむとゝ世のとゝ面しろきをとゝ世とゝ人ゝ笑こゝ
ろをとゝあゝ後撰集よりあゝりて文な
ゝ世ゝとゝ歌とゝ人ハ歌情のとゝさいまり世ゝ世ゝ意乃人ゝ古歌よりとゝ
ゝりとゝ二句ハ萬葉集巻一ゝ河上乃湯津磐村二草武た受者
丹毛薬名ゝ世處世貴手とゝあゝ四の句世世ゝなハ世とゝ
ゝ世の言ゝそゝゝ世後ゝて世ハ顧ひのゝれゝ母乃言の加
ゝゝゝ世いゝ世ゝ世歎のてゝをハ乃重ゝりたゝゝ者ゝハ
ゝゝゆゝまりて未遠く彩ハゝゝとおのゝゝゝ白ハゝゝゝ者

ハ古人ゝ集の陸奥ハいつゝハあゝ世とゝ塩ゝく母乃綱ゝ
ゝ形ゝ世とゝあゝ世をとゝれゝゝり世ゝ今の彩ゝ綱ゝ悲しゝいつな
て引母乃ゝ形ゝ世とゝいゝゝハあゝ綱ゝのゝゝをあゝれゝゝ世
ゝゝ世綱ゝ引ゝんハゝ世ゝゝ乃ゝのゝしゝ世ゝゝゝ世とゝその
世ゝゝゝ世ゝゝ形ゝゝけゝしゝゝゝゝ世ゝゝゝんあゝゝゝハゝ人ゝ而ゝあゝり
ゝ形ゝゝ人ゝ世ゝ言ゝ世ゝゝゝゝゝゝゝ範長卿清輔朝臣の女世
つゝゝゝ世ゝゝゝゝゝれゝゝゝれゝゝゝゝ中ゝ後意ゝゝゝゝゝ
後世後世小舟乃綱ゝゝあゝゝゝ綱ゝ引小舟ゝゝゝんゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

思ひのときさるにあらん弱をひくなる小舟にしもとりてんん
を同じまゝふるえくとなる事なり
○改觀云歌のこゝろえをもつてひ西日さ濱つゝをゆくゝ法ゝ
付くゝつゝなて引くゝゆくゝ海士の苫舟のさまゝ代めをうを魚
をつゝを見を拾ゝを見ゝあるめゝつゝのふあるゆるなり
なるゝこゝになるめをゝつゝやゝと思ゝゝよゝやゝく平ハ老ゝ
も明をゝなるゝき表をほゝく形をとゝつゝハ那也ゝ命
長ゝくゝをゝを海ゝこのひゝゝ海ゝ海ゝきゝゝ那也ゝ又をゝ
海つゝきなゝんゝのハゝハゝうを命を孫ゝゝゝとも有なんゝハ幾
そゝこゝひゝを海ゝくゝゝまのゝ有ゝきを見ハゝゝを生ゝのゝて

命ハ海ゝを生ゝゝを海ゝ思ゝゝ海ゝ海ゝハゝんハゝきゝめを雑
きゝゝをなるをハゝひゝを海ゝ海ゝの出ゝゝを海ゝ葉ゝ葉ゝこゝ吾
命毛ゝ有ゝ可ゝ見ゝ家ゝ河ゝ行ゝ見ゝ高ゝゝある意ゝ海
ゝ又海布ゝ海ゝ魚ゝゝ海ゝゝハゝきゝゝあゝゝすゝをんゝ見ゝ拾ゝ
なゝハゝ海ゝのゝゝゝく濱ゝゝ海ゝ海ゝを海ゝ網ゝ海ゝ海ゝを海ゝ
海ゝゝゝゝゝゝゝハゝ海ゝゝゝゝゝ
○海ゝゝゝゝゝハゝ網ゝゝゝて海ゝ網ゝつゝけゝくゝゝして引ゝ
ゝゝり縄ゝを網ゝて山ゝを海ゝ海ゝ海ゝハゝ那也ゝゝゝて海ゝ海ゝ
ゝ章紋訓豆左天挽船縄也とあるゝく船を引の具形ゝゝ
海ゝゝゝゝゝゝゝ

事ハ仁のまことを生ずるをいふなり生の意也やうやく
ハたらく伊の義なりのそなはるをそのまことのよ
ほ生ずる徳也と思ふべし徳也ハ人のもよ
ほ生ずるを徳といふ事也縄を舟乃てとしてのの
ものなるまことやのくつなをとりて引舟の綱を
らんまとを綱とこそいふ馬のも綱を
ものうしてあさくくよりつる縄をもつるつり縄をくん
やう縄をハ山綱のなかすてこそ引出べきよあしん
象義雑経　又ハ刑アつ形絶　異　鉛絶ノ女
みのしまの山乃絶のをさとのつくあなとをもくこそうつなり

新古今集絶の橋ハ成乃こそをとをとこそとをあることより野の
この絶ハ更ニこそあなとんを事さそ嬉しやゆうつ音すをと
いふをこそ古今ハ支則みのしまの白を絶ハ也故ニをもく
なり始ることあるをこそれしまく絶ハさよ更てと家うつ
とのを四ニをたのをこそうたんくをとよをを白綱を本歌
乃まのくなをまこそくうをすることあをまをよゆ支則のハ本歌
の本ハまのくをを時やとををとゆをとあまを本
歌乃事偏ニ今ハ世歌をとをれこそうなをまとやうそをを
ハ乃世ゆうくハ本なのこそハ世をまこそ故をのよ歌の
ことよをを故ニうのをきめくこのあこそとすべしをと故

新古今集絶の橋ハ成乃こそをとをとこそとをあることより野の
この絶ハ更ニこそあなとんを事さそ嬉しやゆうつ音すをと
いふをこそ古今ハ支則みのしまの白を絶ハ也故ニをもく
なり始ることあるをこそれしまく絶ハさよ更てと家うつ
とのを四ニをたのをこそうたんくをとよをを白綱を本歌
乃まのくなをまこそくうをすることあをまをよゆ支則のハ本歌
の本ハまのくをを時やとををとゆをとあまを本
歌乃事偏ニ今ハ世歌をとをれこそうなをまとやうそをを
ハ乃世ゆうくハ本なのこそハ世をまこそ故をのよ歌の
ことよをを故ニうのをきめくこのあこそとすべしをと故

いてとハもやく位しかをいつさて四郎ををとりていつ事となり
しハ遷都の後ハ大君乃御ものと氏海里なりハ中也さて也工ハ
おのへく甘四郎ハ也ら也ら乃故ているまたハあのつのつ強もい
ひあしをるものの也それよりも稀しく或ハ一枚乃紙を五ともに（フンサイシヨ）
或ハ切りなり藤原ともを折よりてハ牧なりとのひるすめを
○前号の三ケ条乃なかてさもむく歌まるる也てよ言と用ひ
こまとこれまハ此の者乃事きといふなりこ一枚乃紙を
如風の者氏事ものとよこのこ所まと言ハ事ものこ
ろハ那也こハやうを本歌のこ乃ものく歌の事ある也歌
更くあるひあしよなかてさもむくして夜中也とのいかなる

里ハ乃最事とこハやさをもとろるこ歌なかてさもむくこととなり
図しさこハ去るよのまもんなまとく事くしてのこを事こ
とのひたなとハ山間おるるうのつ頃をさるひハ
本歌のまくよなて事くとよくいひあるさまこうさまハ
山あるう乃事きとのこハきこのこもあいさる中
ものこをまとり日花のハ詠ち者氏事ものとあまハ海なりめく
やすう者さきこハ人ものまとこ筋あるハ事るをてけ
こるのんとのことのみるのさまこるのの南府の撃風也図書云
去年よ如てとて去年の結津那の船云乃あとの事也
此云ハ上つ世より世しを齊明天皇造り改め孫ハ天武持統

のすがたこそまもるべくこゝろゆきて語ひしまもるを今の京
となりてはあるべきまことにいとうき世故郷を
思ひまとふ人あまたそこに古今よりたゝぬ所なれば
て故則こゝろ引くこゝの白雪つもりし故てさもむくなりまさ
る迹とゝくるに古京の故てをいへ世同一神のよさんに古京
てゝ中ゝ古里人よりのゝ山一迹をこゝのまゝ一日をこゝのまゝは
かゝりとよめる歌はいとゝふるもさらにこゝの社宮に古郷の
山の中ゝふるゝ更てよりゝ神の山迹ゝとゝ山ゝこゝに世ゝ
をたゝに京の古里とせんこゝにたゝ京よりゝ古郷に迹ゝこゝをまも
よりゝも伊勢そのゝゝ迹ゝ高山ゝそあまを思ゝゝ今京の

人をゝ思ひ古郷と同一國ゝまゝ思ひ迹ゝのんと和ゝゝを
ゝ思ひてよめる歌ゝやあんゝゝ世界をゝ京のゝゝ
すゝ古今ゝ故てゝ乃者郷の山ゝゝ世界をゝ京ゝ
なりの者ゝとゝゝ氏維ゝの故ゝ迹ゝゝ氏郷氏
故てゝもゝゝてゝゝを世ゝゝ古ゝ迹ゝゝゝゝゝゝ
し野の故ゝゝを世ゝゝ世界郷迹古
人ゝゝ歌ゝ者ゝ故ゝ者ゝゝゝゝゝゝ
らす撰者昌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ野の山ゝ迹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世故郷ゝゝ世郷野郷ゝの故ゝ者ゝ故ゝ

應神紀に幸吉野宮とあるを古事記には吉野白檮上
ともあるにはこれ御所のやうにまことに吉野のいつこ所ゝなん今更
つまるゝさより所しすつる推あてるいにはこれそこなる
里七代の後なる雄略紀の吉野こそあるゆゝ結構の離宮あ也
まこと幸御馬瀬命虎人狩場とあるも芳野也こゝ所に行
宮あるしこはる里離宮ゝ所也今知るゝ事法十七代
とゝく齊明紀に作吉野とあるも結構所にて天武持
統の兩帝ともに行幸あるゝ詩ゝ世にいちはるき也
こゝにこれ初いつこよりつこまてとゝ坂ゝとゝひ今なん千
歳のいつゝよりひもしつる地名にはこゝ更にるゝ所なり

又こゝにるゝ乃名區なんゝ吉野こゝ所ゝ見すゝ君折ふ
まゝく所遊ひまゝなんゝこゝいやつきくはいくゝ雜言をゝ
作ゝまたなんこゝにこゝ所いのゝ人あまこゝるゝ
見けん事尤ゝこゝ里離ゝ又古今集ゝよこゝ人ゝこゝ
方ゝ歌人なんゝ其地理ゝ所ゝ里ゝ所ゝ
里ゝこゝ里ゝ人なゝ人ゝ古人の歌ゝ
こゝ作ゝ世ゝ作ゝ時平法ゝ其ゝ歌ゝ風
こゝ里ゝ所ゝ幸ゝ里ゝ所ゝ里ゝ
此作者ゝ所ゝ吉野ゝ所ゝ
よゝこゝんゝ更ゝ所ゝ事也ゝ

よ古人を形こすくきよあらん又世のなかに古跡の那中よ
ありてを山をもるもなりんまた山迎しといそんを倫なく
たとひ山平なりんをもよ宮殿造りるくきに中よ就
て一面乃平地なるへしと海ハうみくかの岸町こうのん
やうれこんまハあのつうう迎しともいそまと海又那也今
現に景樹う位山ようこうりハやうそ神楽の図侍うて迎御
姿よつうなるおうう神ほの図よ迎しとを吉田乃山よ迎
りまとにとも皆人那ようみ岸よもとういつうれしをと甚
山乃内なうう志りうく甚史岸を能ふようて町こうりん
うハ甚寶をハ山せうをうよ迎うう寺つうも

初名ハ道快（ダウクワイ）
巻初を十月
道園と改ム
号信和尚より去
ハ道号し

第六　僧正道園　法性寺ノ道前関白忠通公ノ孫子　延暦寺ノ座主し

あるかけなくうきさそ氏の濃山ろれ春ろ松よすこそめの社
千載集雜中歌ろ人法師ろ法師ろなきゆををろうをこすす天
ハの民中を濃山ろ能ハ山よ位拾ろるわろ墨藤の社とと言り
墨藤よ位の高をもりくまとろるる中くことろわををまのるく
とハやうのなくしやうる地ろるろ松の墨藤の社なと形ハこのうを
事なくるとまあ地又思ようよこハおるけ形ろをもるる雲濤
うすうて氏を摂ろの行里ををとする部と事白まてをれ
るけ形くをうけくよのまとし意ろるやあんとれとやくふ
ろうよ維まくくとハうとハ形きく維し

いつまをあるやうなるもいんをやりてとこのく中成侍りる迦葉仏
言のとハ為ようとそ有りのようみのひしくるをいすくを今す
こーあるあ事をうく結ひと義法云おちりなくハあるりを
ゝ氏意うそおやくをうきを事をさるをけをなくるまをい
ふうそは果のいうをうるもあくあ仏をうたとるもなくう
けるそうをうきをの武乃無うんいのををしをするまうれと
いうる迦員と乗無乃意なるいいをうをうくくをそうハあひ
ゝをくとと乗いそあとをるべきをまをさとといひうを
しそハのをうのハのいうくく兵仏を為もあ事をいうりうま
ハ夏をなりを山をゝとのこいくをるのもうきをと

いるるうをりとるハのの深をりうるの意うの思ひあやまるる
みくをうきをの武を兵をの武といいを意を兵を根傳教
大師の意を拡ゝ冥加あくを孫人の弟より法家ゝの一ゝをな
まを改親ゝ法義強法師思を思ひくよとのるなるくと
いうり彼文云を強者如果理を悪嫉況滅後法を為
使人投者如果則為法滅後をを初をるゝ法義強勅裁思
ゝ書寫をを法義強者ハ曲知恵人為難如平尾佛ニ和
ハ家と いうり を強を家と ゝするくなるとハこれをおのひてよとこ
孫ゝるくいうと

○初をるゝいうをを山ゝるすもまくにるをとゝをを法をの武の安

うん祈をすると云けるハ非也結句ハ出すこそあれ神と
ろこのひすてゝ出すもしまゝにちらくとのゝ意まそめる
ハうんやうと云ハ出すよわまと事源の神なまいるとやうな
あしそいさいきてゝ云事也又云或ハ事源を作るハ
いひけきというと出歌きろのひうけすとしてこゝとわるとゝ
すとゝうるを非也れとこの也或ハいひうけすというるハいうな
たゝもとゝ又いひうけすとゝ仏のことわるうをさうん弦文
秀句ゝすもとうけんいめへそりそあれこゝもそする警
ハ同集出歌のつきよ出をそもさ出歌乃事源乃
ゝゝ思ひやまとあしハあ上事源のゝゝ古今も出川の山

つよ今ハすこ清のゝゝなゝあるやうふいこのもを事ハこのろま
うゝの用ゝゝきゝ句頂すそうさ出の氏よあるゝゝれなゝさ
しもたゝゝるにいひあうゝゝうるを文ゝくハこゝわるゝ乃ゆれと
さ海を出ゝ歌ゝ或ハをゝ出ゝうんゝうゝあよゝもいひうけゝよ
ハあゝすゝるゝゝすけゝくいゝるゝの也事源よあるゝ上神な
らんゝのハいゝふをゆさゝ形ゝまゝを歌ゝいゝ歌ゝを載ゝさ
ゝゝゝハ猶ゝ

入道前太政大臣　法名ハ西園寺公経公　坊城内大臣実宗公ノ二男

花さそふあらしの庭の雪なゝてふりもゆくハ春乃ゝ行り

新勅撰集雜一首詞書ゝとゝ行ゝるゝ出歌花をさそ

ふ歳の暮まく迫の窓ゆうてとこそ
ふ花ゆるをおまつをてよこそ
よ初をなさこゆより初句よりこゆ
ひくく法師あやそ野をあのつ
すてうまきこうるをとつ
とひ也まゆうこは世ふ
ものは考こうる我ゆ也と宣
海老のこをおまとのせく
をふるく家ゆくよ思ひよ
老ゆくゆを思ひ入く業

を盛れあるくさ法師のとと
を存ぜなるというゆとひあや
前の感をこすくる方おさ
よあくたとは夜服のゆ
て和也法師の者ことさは
ゆあるよ仏ゆうさるゆを
いのゆを解をうすくを
乃介なさ也今の法師は
まちあゆといはく新古今
板みゆうとふくゆひむ春

えてこの歌をよみ侍べき

○改觀のことをよりてよつきてこく玉髮のゆそろることをとよの秋
てまとろのやとゝいひ初ることを楊乃ゆゑいつしゝ流の言と
ちるをはたくふりもゆとりて歌くとゝ秋ゝ芸ゝ秋ゝ也
侍歌こゝ言ゆくゝ乃浦をあとをこゝろ乃ことゆゝちれ言ゝ
よそへ梅ひゆくゝよなそこゝろくゝのひゝゝ那也ゝ海ゝ一首乃
うへゝゝ句ゝゝゝ事也

權中納言定家　五條ゝ位後成ゝ子　母ゝ美濃ゝ親忠ゝ女　法名ゝ阿ゝ
はつゝ伯者ゝ云ゝ女房ゝ

こゝゝくゝをまつゝ乃浦乃ゝゝゝ

を義しなんりのハやのとぬくをつくまたるあれ今一同
さなるまあ〳〵すやとそ四ハ所ハのハとぬくのさをとて
とのひのくさく〳〵なとといつるハいとふつさ拔ゆて〳〵
一ハさのことをとこハさそ甚同のたりをあとさんを
るるのこうのそ四の黄ハ葉のすきすり紅ふてあるとハ
るをもさ葉ハ紅ふくすきさり水ハ流ましてうてあるのあれハ
ハるをふりゆしあのこをのひとん料のとぬくのさあるなハの
らんをを金のをちの大無山のをれまつことひをそ水とハハ
なる同しこハとをるハりる葉のぬくをとも山のをれとく
まつともさをまとるこのふしハそんや能をくりあくりぬとと

俗新ニ後三位ト作ル説

いひ和歌のうきまなとといつるハこて〳〵をを合をこて甚
類をうくるのこすつく〳〵高砂の類ひと同をそハんをこあて
ハ井く〳〵甚俗のきまなとおよ海ををとるを白ものあ子ニ
日月乃屑祈ときなといつるハのこれをと同しとをまる
ハあるそを迎ぜ方ハ白ものく〳〵ほのこをまつと海そて四
まるのことハいハ俗をのあ和よるこるハいるふもをを
雖し今ハ高歌乃本体りつをそあ〳〵あをを海の也

後二位家隆　壬生中納言光隆マノ第二子ニ俗称マノ門弟

俗称そよく好て氏山門のををハみそをそ夏のをる〳〵也を俗
新勅撰集夏寛喜元年世御八内の御屏風ものを改撰之本

歌に此よみそきする形しの小河乃川風よいの里を流るゝふ
詞しと云〻又云後拾遺集頼綱云この橘乃薫そよく白雪
はことゝも結のこゝちして春ゝ世ゝと同しこゝろ妹と
初恋ゆゝしを合めゝとゝのり初恋云大うこの川風さよあゝを
なしに此ゝとゝ出そよさゝゝとゝ人あまゝ流しさあまゝ
ゝこゝく今〻結のこゝちせしゝ流ゝゝ出みそきゝとそまゝこゝ
なゝゝるゝしゝゝゝとゝ人ゝ世桜ゝゝゝ地名乃なゝゝと云の
橘の薫を用ひなゝ人事又後世の習撃也古つゝ歌作ゝけ
ゝゝゝあゝきゝゝあゝ花ゝゝ流ゝゝゝゝいひ和ゝ次の花乃
こ今乃めゝゝゝゝを末ゝおよゝゝゝ一首の意脚を用ふる

ゝゝゝゝ事ゝ更ゝなゝ世和ゝゝゝゝゝゝゝ流ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

をもてかへるこてる橋の姿はいとやさしくなよなよとそこにそ
ましたるやうにもゆくくてはかりの中川は風のそよくとよ
うにきくくの四面なるまいはせのつゝみをまわりてまの須
なくてこのかりのはうなつゝもたゝえ侍りしをかくし
てとろかさよきくえくりとも又いとゝ涼しとまするまてハ
あちつゝれくや彩ハ思ふるおちそのち黄ばまあるまな
りまとまもの葉山の橋のあるそよくみるれはあるに
ちくく一首の巧拙をすてゝ唯のこゝもまつりなるいとゝ涼し
とをくきくつきまの彩ハやもらのはりてこそなくれふ
ひのやうんとも又いとにともんれまるくよこなくつきまを

うのまを橋とつゝ思ひてひとすゝ函嶺あるを古風ありと
あやまつ事なるまを又彩くくいるの彩ハ新古今の志賀の浦
や遠さうをゆく浪見ありてを出るるの月とあるみく
実の赤旬ハいとも美くくきこゝもそするとれと汀よりをこれ
もくくて遠さうをゆく浪見をとハこゝもをこゝやをくゝとり
雖しさ浦ハ赤の氷をゆくくこゝを赤の氷くくいるゝゆこ
をくこゝるこの姿理のまを迷ハ彩浦拾遺の小船黒ゆまるを汀や
彩ゝん赤をさうをゆくを志賀の浦ゝこゝあるをゆくくよこゝあの
してこゝをハ更のまこのをあのものなを今ハ世ハ彩を見侍を
ぬこのきりハ誰を例のゆゝとりゆくこゝやゆん

坂鳥羽院　師諱　尊成　高倉院第四皇子

人をとをしみ思ひあまりあちきなくいきをあはれとおもひ

續後撰雜中歌さとの秋の人のいとなくて秋の人の恨み

きさらぬいちはやきいきをもとめ思ひ歌くまぬ思ひなる

おもをのこと思ひ侍へしとも思ひたりけるあはれとも

めとも一うるつきそ思ひのをあちん世乃大河思ひいる

鏡金のかりきまく形ろいをいつそとあちすのをいあるいろ

ろこの恨めしくあそこ形こ乃いとかくてこそくるあれ

しくよのを侍へとおろ〳〵しちいうそとは思ひ歌を侍へ

とさるた御歌ひるこうをあらねは其ひ形〳〵てをきを侍へを

あちきなくとこそ宣へはあちきなくいきを侍へ乃

あはれとおもひつるめきををの白ろ人ををとたくまを

侍へまつ思ふあつ思つと重祐を侍へるわをと形〳〵

恨乃ひこしきを此御歌よを侍へい建暦二年の春すて大

内歌合十三と申ける時をすれ共同時乃御製ようきをいと

上思ひ侍へをそつのをめる富士氏仁りの名くまの宮くとをろ

め侍へり續後撰よ友の志ろをるまを〳〵ろ侍へやうを

をこの御ひとつよなをもをてくきを歌ををるうをいをひ

し彼大海代のをまめけまくをうを形おまてくをまををりを

○初学よあちきなくハ味氣無を和漢とをの耳幸花

酸鹹五つの味よりこれをうまし銀雅をやしし
なといふものを生ずるなり人の心をあらはさ
なりとのつり佐よりみるくしといふ仏ありとなへる形色あ
ちきなきさハ酒のあく厚と家無のさりへるを無ものちなへ
ハあつきなりとのこいひるくすべて仏のうへるを落あり
をつるをまのをくいつ時ハこのひなきるはるきのかをまる
をこみるくを佐よあちまれむ学の中あちきなきの黒なく
いつよいるくをたる事なるまハ今さら解を待へきを非
をあちこのつハ重なるを連ありて解るやうの厚きうへを
すくいつり茶湯花槇柳樺赤小豆なと皆一芝の黄花

事なるを実連なるの称まこ鰐冠鴨なとすくまを解
集群形するの称をそもれるちあつまるの酒をとるを外あ
こあとくはこらを巻る皆みこをと紅しとくあちいひを厚
味すてうまきの名清酒すをうまこのをあちなし
とのつをなるを出るの酒をとるハ本まこのるまをさる
をんをのみをせんをなるをきを改親をを思をまをま
くををせんるこなきんとるハ品数いれん為
よとけるのこ佐よみるくしきなるいハさるふ仏つる事
をまるこ書紀よ無道無材無端無頼とのこを文選史記よ
無益無為毋為とのを遊仏窟よ無庸なとのけるとを

これあちきなしとて法皇をあそばしたてまつりて志
しくやうなれば其文宮の流むへらひ
順徳院　御諱　守成　後鳥羽院第三の皇子
たてまつりきやうふるき新儲の君なりなり
續後撰集雜下歌に承久の頃この内裏
る貴也とて大内をなりやうやうて其大宮の差てうさまを
存のさうをせく思しつるにけりつり給るとてしきた百
のうすをやつくせる嫌て山まうて古へ大宮の寵をそく
のこいひしを今京こ形こ公宮嫌の事とそいて也とい
つもそこ形のつまを貴いあまもとつるよるもあるも

宣ひく存の縁よりこうてもつるのこそ存ひすす
やけそ形をぬ八後世のふ世也そこをめてこく寵さうえま
ぬる大宮をいと和そひこる世さうれた内世のさまおる新こ
ゆうこちしていとも形きさ内製也大文帝乃隠岐の國へ
遷さまのひ〳〵こるあるとおちん伊をへ引こうて佐渡の國へ
うつり海〳〵ん大内の形とひ〳〵をおはるを奉るる今
こそ後鳥羽院〳〵其時大内野世五とかまる新ふ新あそうま
せ八世百姓の内製八と流新なんのいむくるいとわるまほ
との内述懐也このつもあるひこる大内世又出さ世形ひ〳〵法
すくをれつるこなきまいあるもこそ世の大宮をいとのこなつ

内閣文庫

うしろ髪を思ひ出るやうもうちたゝ
うはるゝ風ぐすやい

今此書は軒冲阿闍梨乃改新抄之簡易なるもの
まとして筆ゝるハ門人熊谷直好ら此一書のよるあるを問
しなゝるをかゝして書つゝ世ゆゑとゝのを
おのゝ古へ乃学ひをく今此教てようとゝして古へとゝ
撰たれ此一まきをうめひ侍る事ハ然乃先もて抑
の意を対りなひとゝきものゝ也と一百首(モヽシタ)の一巻なあ

ゝる事侍ゝハ限りなきさゝひなるゝ長門守平景樹
文化の十二年ゝとゝひなるあゝ此日なるゝとゝんぬ

[illegible]
收拾孤美志[illegible]
[illegible]傳[illegible]
豈[illegible]藏之[illegible]一日也[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右之通り勢必要務之事歟
乎方今徳川世界[illegible]
人[illegible]所以詩曰[illegible]
[illegible]

門人　[illegible]

東塢塾蔵

文政六年癸未七月刻成

弘所書林

江戸　日本橋通壹町目　須原屋茂兵衛
浪華　心齋橋筋安堂寺町南　秋田屋太右衛門
京師　寺町通　松原下　勝村治右衛門
同　寺町通　五條上　天王寺屋嘉兵衛
同　三條通　御幸町西　河南儀兵衛

国立公文書館
National Archives of Japan